

こどもの暮らしと文化

—昭和12年～平成12年のこどものあそびと暮らし—

井内 昭子

(手塚 恵子ゼミ)

昭和の時代が終わった時、様々な感慨とともに、私は、テレビの特別番組や雑誌・新聞の特集を見たり読んだりした。そこでは、昭和天皇と、同じ時期に亡くなった歌手美空ひばり、そして太平洋戦争に関する内容が繰り返されていた。他の時代では不可能であった映像の記録が豊富に残されており、それを使って昭和史をくりひろげ、今の安寧の生活とあまりにかけ離れた当時の様子を大きく取り上げ、興味だけで視聴者をひきつけていた。

結果としての「今」については、夢が叶ったこともあり、おやこんなはずではなかった、と感じることもある。前者は、食料問題の発展である。三度の食事に事欠くような飢餓状態から、飽食とまで言われるほどの発展である。後者は、地域の中で、こどものあそび姿が見られなくなったことである。

これだけ、食だけでなく衣食住すべてが豊かに心地よく改善されてきて、元気いっぱいにあそぶこどもの声や姿で、家々のかど（町内・地域）が満ちるはずであるにもかかわらず、ぱったり見られない。朝のわずかな時間に、集団登校する小学生や自転車通学の中学生の姿が見られるぐらいである。こどもは、どこにいったのだろう。最近、とみに感じることである。

もう少し、詳しく述べると、次のようになる。

私は、これまで30年余を、保母（保育士）として保育所の中で働き、乳幼児と共に朝から夕方遅くまで過ごし、時に連携する小中学校に行き卒園児に出会う生活を送った。定年退職してからの子育て支援センターでの2年間の勤務を終えた後、ここ2年間は、週一日のボランティア活動（高齢者の介護予防事業）と社会人学生の生活を過ごしてきた。いわば、こども施設での生活から、一般人の生活になった。そのとたんに、こども達の姿が目从前から消えてしまった、と感じたのである。

それは、あたりまえのことではあるが、施設以外の場所、即ち地域の中で日曜祝日や夕方など、学校（や保育所・幼稚園）が休みであったり放課後の時間帯にも、こども達の姿が見かけられないことに気付いたのである。家庭に戻ってから、近所の友達と集まって遊ぶことがないのだろうか。

そして、これでよいのだろうか、と考えた。

第1章 目的

〈昭和の時代から平成の時代までの「こどものあそびと暮らし」で、変わったもの・変わらないものを見極める〉

なにもかも変わってしまった、と大雑把に片付けるのではなく、こどもの私が、中学・高校生の私が、社会人の私が、当時の人と同じ希望や夢を共に過ごしてきた昭和の時代を、よく見直してみたい。その時代を生きてきたのに、気付かなかった多くのことがあるはずだ、と思う。それも、こどもにとって、どんなことが起きたのか、見つめなおし考えたい。

そして、私より後から生まれてきた人の、こども時代がどんな状況だったのか、比べることで何が変わったのか、変わらずにあるものは何かについて、みつきたい。

親達が、釈迦力に働き続けている間に、大事なこども達にどんなことが起こったのか。

とくに視点を「こどものあそびと暮らし」にあて、いろんな年代の人にアンケートを通じて実際の体験を聞いてみようと考えた。

第II章 アンケート調査

昭和から平成の現在までの「こどものあそびと暮らし」の実態がアンケートでわかるには、どんなことを、誰にどのようにしてどこで聞くのがよいかを考え、次のように計画を作り実施した。

1. 様式・項目について

アンケート用紙の様式については、幼児期や小学生学童期における「あそび」と「暮らし」に大きく分け項目を設定した。

ただし、期間をおき実施した中学生については、「読書」（愛読書や見ている雑誌・テレビ番組など）の項目も作った。今回の集計では、同一条件にするため「読書」は入れていない。

項目の「あそび」については、経験したあそびとして、「集まって複数であるあそび」と「自然のなかでのあそび」の2種に分けた。

一番に知りたいのが「集まって複数であるあそび」であった。子どもなら、まず、群れになってワイワイとあそびながら、いろんな子どもがいて、いろんな家庭や親・暮らしぶりまで知り、そこから、今後の人生に欠かせない生きる知恵・人間関係と社会常識を学ぶからだ。

あそびの項目としては、こままわし・チャンバラなど昔からのあそび12種を並べ、経験したあそびの欄に○をつけてもらった。その他の欄をつけ、自由記述とした。

持っていたおもちゃとして、内と外でのあそびに分けた。記述式にしたので、被験者が思い出しやすくするためと、家の外でのあそびと中でのあそびの変化も知るためである。

ほかにも、あそんだ場所として自宅、近所など、自然環境として山、川などそれぞれ5～6箇所をあげて該当するものに○をつけてもらった。

また、絵本やお話をきかせてくれた大人として、父母・祖父母・その他をあげ、ほかにも、おでかけや、相手をしてくれた大人として、該当する人に○をつけてもらった。大人との関わりを見た。

あそびではないが、こどもの頃によくあった(大人になってから考えると原因や理由がわかるのだが)ふしぎなことやこわい思いをした体験も、自由に書いてもらった。

「暮らし」の項目は、家の手伝いをしたことや、その内容を知ること、暮らしの変化がみられるかと考え、自由記述とした。同じく、服装・履物などと親の仕事（外勤・自営・農業・その他）・食事やおやつ（自由記述）も入れた。

現在の大人達が、どんな子ども時代の思い出を持つのかも知りたく、思い出の自由記述欄と、子ども達（アンケート内容で対象にした幼児期・学童期の子どもをさす）におくる言葉として、一言書いてもらう欄を最後につけた。

具体的な項目内容は、以下の通りである。

- I. 経験したあそび A 集まって複数である（こままわし、ほか全14項目）・B 自然（探検ごっこ、ほか全7項目）・C 絵本・D お話・E おもちゃ・F おでかけ
- II. まわりの大人との関わり A 相手をしてくれた人・B 内容
- III. あそび場 A どんなどころ（自宅、ほか）・B 自然環境（川、ほか）
- IV. ふしぎ・こわい体験 A いつ・B どこで・C 内容
- V. 暮らし A 家の手伝い・B 服装・C 履物・D 髪型・E 親の仕事
- VI. 食事（好きだったおかず・おやつ）
- VII. その他・思い出（記述式）
- ♡ これからの子どもたちへ（記述式）

2. 対象の被験者・実施方法

直接出会って一定の人数への聞き取りをしたいと考え、私が日頃出会う人で、出来たら個々の自宅を訪問してするのではなく、次の3団体の人達に依頼し実施した。

最初の、亀岡市子育て支援センター来館者の幼児11人とその保護者42人については平成17年8月～9月にアンケートの聞き取り調査を行った。経過としては、「亀岡市子育て支援センター」のセンター長に文書で調査依頼をし、許可をもらった後で実施した。

方法は、来館者一人ひとりにアンケート用紙を直接手渡して依頼し、説明した。記入中は、被験者の子どもがけがなどしないよう、私が見守り、記入が終了し回答用紙を受取る際に、内容の補足を質問した。その後も、子育てについてなど被験

者から話題が出たので、しばらく話をするが多かった。

2番目の、NPO法人青空ふれあい農園・ハーブ倶楽部ディサービス利用者スタッフ9人については、平成17年12月のディサービス当日に行った。経過としては、農園代表に口頭で依頼し、許可をいただいた。昼食後の時間に、一斉に説明し、用紙を配り、記入してもらい、回収した。

3番目の、亀岡市立育親中学校1年生86人・2年生94人計180人については、平成18年11月に行った。経過としては、学校長に電話で問い合わせた後に学校を訪問し、調査の依頼状と生徒宛の趣旨説明書及びアンケート用紙を提出した。後日、アンケート項目の調整の連絡とともに、1・2年生へのアンケート調査の許可をいただき、即日、生徒数180枚の用紙と、クラス数6枚の生徒宛書を届けた。

方法は、学校長から各担任教諭に手渡し、期末テスト最終日に各教室で、一斉に生徒に配布、記入、回収していただいた。当日学校へ行き、受け取った。

よって、被験者は3箇所合計242人になった。

3. 集計

全242人の集計をすると、被験者の男女比が昭和12年～昭和55年生まれの成人及び幼児合わせて62人においては、男対女が17人対45人と女性のほうが男性より2.6倍もあり、大きくひらいた。中学生のみの男女比では、83人対94人とひらきは小さい。

また、世代別の人数比では、成人対こどもが41対191と、こどものほうが成人より4.6倍もあり、これも大きくひらいた。

そのため、論文では、上記の女性分および、中学生は2年生女子のみの集計を参考とした。それにより、人数比が成人対中学生・幼児は41対55となった。

よって、集計対象者は、合計96人となった。

年令内訳は戦前戦後期：昭和12年～30年が12人、経済の高度成長期前後：昭和31年～50年が22人、バブル経済（昭和61年～平成3年）前後：昭和51年～平成7年が58人となった。あと幼児4人を入れると、合計96人である。

	NO.1	NO.2	NO.3	NO.4	NO.5	NO.6	NO.7	
生まれた年代・年令・計人数	昭和12年～ 昭和20年 1937～1945	昭和21年～ 昭和30年 1946～1955	昭和31年～ 昭和40年 1956～1965	昭和41年～ 昭和50年 1966～1975	昭和51年～ 昭和60年 1976～1985	昭和61年～ 平成7年 1986～1995	平成8年～ 平成17年 1996～2005	
	69歳～ 61歳 9人	60歳～ 51歳 3人	50歳～ 41歳 4人	40歳～ 31歳 18人	30歳～ 21歳 7人	1993～1994 中2～14歳 51人	1999～2000 当時幼児～6歳 4人	
生まれた年代別・人数内訳	昭和12年 2人	昭和22年 1人	昭和35年 1人	昭和41年 1人	昭和51年 2人	平成5/6年 51人	平成11年 1人	
		昭和25年 1人	昭和37年 1人	昭和42年 2人	昭和52年 2人		昭和12年 3人	
	昭和16年 2人	昭和30年 1人	昭和38年 1人	昭和44年 2人	昭和53年 1人			
	昭和17年 2人		昭和40年 1人	昭和45年 3人	昭和55年 1人			
	昭和18年 1人			昭和46年 3人				
	昭和19年 1人			昭和47年 4人				
				昭和48年 1人				
				昭和49年 3人				
	合計数	9人	3人	4人	18人	7人	51人	4人

表1. 集計対象者 年令内訳一覧表（平成18年12月現在）

4. 集計方法

集計の方法として、随意に選択する項目は、選択した数を記載した。

「その他」の項では、自由に記入したものは書き出し、同じ内容を書いたものは横にその人数を記し、延べ数を合計とした。

設問に対して回答なしも多く、それは、不明として人数を記した。同じような内容でも、出来るだけまとめず、記載した。（例：着せ替え人形・リカちゃん人形・シルバニアなど）

世代の区切りについては、アンケート回答者の生まれた年が昭和12年から始まり、最年少回答者（実際はその保護者が回答）が平成12年であった。年代を約10年間ごとに区切ったのも、太平洋戦争の戦中戦後という大きな区切りが昭和20年にあったからである。あとは、機械的に10年きざみにしたが、高度経済成長期と呼ばれる昭和35年前後やバブル期と呼ばれる昭和61年から平成3年など、特徴的なことはその10年ごとの中にもあったので、集計表に書き入れた。

今回、本文の中での世代のよびかたを、昭和12年～20年生まれの人を平成18年末で69歳～61歳となるので60歳代とし、それ以降の人をそ

れぞれ 50・40・30・20 歳代・中学 2 年生・幼児とした。(あくまで、今回のアンケート回答者についてであり、人数もばらつきがある。)

5. 集計結果数値の比較

上記の集計数値を回答者数で割り、一人あたりの平均値にして、異年齢世代の比較をした。

年代ごとの人数では、大人の被験者数で、3～4 人などの世代があるが、回答内容は信頼できる意味のある数値と考え、比較考察する対象の数値とした。

顔を見て一人ひとりと話をしてから記入してもらい、丁寧に時間をかけて書かれる姿を調査者(私)も目撃しており、人数は少ないが、よく設問を理解されての記入であったためである。

被験者に共通することは、現在亀岡市在住である。また、今回の収集会場となった亀岡市内の各施設(子育て支援センター・農園ディサービス・学校)におられたことから、健康で社会参加されていることも、共通する。

それぞれの施設については次の様子である。

子育て支援センターの来館者は、乳幼児をあそばせるために、休館日(毎週木曜日)以外は毎日のように来られる常連の保護者とその子どもや、日祝日に来られる保育所・幼稚園児の親子などである。(今回、集計に入れていないが、来館の保護者 42 人中、30 代の父親 9 人(20%)もある。)

青空ふれあい農園・ハーブ倶楽部は、介護予防として、元気な高齢者による農園活動が主のディサービスを行っている。60代～70代の利用者は、週一回毎週火曜日の 10 時～15 時を、40代～60代のスタッフと共に過ごす。

育親中学校は、亀岡市西部の山間地の農村と住宅団地にあり、校区内に高層マンションなどはない。1・2 年生各学年 3 クラスで、生徒達は 3 小学校区(畑野・本梅・青野)からバス・自転車・徒歩通学をしている。

第三章 アンケート集計と比較

比較結果

アンケート集計結果の平均数値を項目別に見てみると、世代間に大きな断層(変化)があるもの

と、あまり変化しないものがあった。

世代間の断層(変化)は、経験したあそびの中の「集まって複数であるあそび」と「持っていたおもちゃ」の数値にあった。あまり変化しないものとしては「まわりの大人との関わり」と「あそび場」があった。

まず表 2. で見ると、集まって複数であるあそびの平均数が、2 本の断層を経て、年々階段状に減少していることがわかる。

昭和10年 代生まれ 60歳代	昭和20年 代生まれ 50歳代	昭和30年 代生まれ 40歳代	昭和40年 代生まれ 30歳代	昭和50年 代生まれ 20歳代	中学2年	幼児
13.4	13.0	8.2	9.8	5.9	8.0	4.5

表 2. 「集まって複数であるあそび」1 全体の平均数値

即ち、「集まって複数であるあそび」の平均数が、昭和 20 年代生まれ(50 歳代)の 13.0 にくらべると、昭和 30 年代生まれ(40 歳代)では 8.2 であり、昭和 20 年代生まれの 63% と減っている。

同じように、昭和 50 年代生まれ(20 歳代)ではあそびの平均数が 5.9 であり、前期の昭和 40 年代生まれ(30 歳代)の 9.8 とくらべると、約半分(60%)となった。しかもこれらは、年々階段状に減少している。

このように世代によって段差のある変化は、その時代の変化と関連するのであろうか。

次に、「集まって複数であるあそび」の個々の内容を年代別で見ると、おはじき・石けり・はねつき・まりつきなど、技術や伝承の歌を要するあそびが絶滅に向かっていることがわかる。

	60歳代	50歳代	40歳代	30歳代	20歳代	中学2年	幼児
おはじき	1.0	0.7	0.5	0.5	0.4	0.6	0
石けり	0.9	1.0	0.5	0.7	0.3	0.3	0
はねつき	0.9	0.7	0.5	0.6	0.3	0.4	0.3
馬のり	0.7	0.3	0.5	0.5	0.1	0.2	0
まりつき	0.9	1.0	0.5	0.6	0.3	0.3	0.3

表 3. 「集まって複数であるあそび」2 あそび別平均数値

「集まって複数であるあそび」の、その他の内容で出たあそびでは、自由記述にもかかわらず多くの記入があり、先の世代の断層がここでもくっ

きりと出た。

60歳代	50歳代	40歳代	30歳代	20歳代	中学2年	幼児
1.9	4.3	1.3	1.6	0.3	0.2	1.3

表4.「集まって複数でするあそび」3 その他の内容で出たあそびの平均数値

ここでのあそびは、各時代に共通するものもあつたため種類別の一覧表にしてみた。人数比を勘案しても、やはり段差が生じている。

一方、トランプ・花札・百人一首（坊主めくり）・碁・将棋などは、本来大人のお遊びであつたものが、家庭に置いてあると、こども達も簡単なルールであそんだり、時に大人が本格的に手ほどきしてくれることもあつたゲームである。これも、昭和50年代生まれ（20歳代）以降で減っている。

	昭和12年 ～60歳代	昭和21年 ～50歳代	昭和31年 ～40歳代	昭和41年 ～30歳代	昭和51年 ～20歳代	平成5/6年 中学2	平成11年 幼児
あやとり	○3						
めんこ	○2			○		○	
石あて	○						
ゴムとび	○	○3	○	○6		○	
学校・探偵ごっこ	○	○		○3			○○
缶けり	○3	○		○3	○		
花いちもんめ他	○4	○		○		○○2	○○
かくれんぼ	○			○	○		
陣取り		○		○2			
トランプ花札坊		○○○		○○○		○○	
碁将棋オセロ		○○		○○			
縄跳び		○				○	
ビー玉ペーゴマ						○	
字かくし				○			
バドミントン			○				
けんぼ				○3		○○	
棒倒し				○			
凧揚げ			○				
ドッジ・バレー			○○	野球			
編み物	○						
テレビゲーム						○	

合計 17種9人/13種3人/5種4人/28種18人/2種7人/12種51人/5種4人

表5.「集まって複数でするあそび」4 その他の内容で出たあそびの種類（○の数はその項目のあそびの他種の数、横の数字は記入者数）

項目調査からも自由記述からも、こども達は「集まって複数でするあそび」を、年々しなくなってきたことがわかる。

では、こどものあそびは、肝心な仲間は、どこに行ってしまったのか？「持っていたおもちゃ」の平均数値や内容から、あそび仲間の変貌を考えていこう。

「持っていたおもちゃ」の平均数値や内容をまとめたものが表6である。

	昭和12年～ 60歳代	昭和21年～ 50歳代	昭和31年～ 40歳代	昭和41年～ 30歳代	昭和51年～ 20歳代	平成5/6年 中学2年	平成11/12年 幼児
友達や家族と	2.0	1.3	1.8	0.9	0.9	0.9	1.8
ひとりで	0.7	0.3	2.0	2.0	2.1	1.3	2.5
合計	2.7	1.6	3.8	2.9	3.0	2.2	4.3

表6.「持っていたおもちゃ」1 目的別平均数値

昭和30年代生まれ（40歳代）の「持っていたおもちゃ」の平均数3.8は、その前の昭和20年代生まれ（50歳代）1.6の2.4倍も増えている。30年代生まれ（40歳代）以降の40～50年代生まれ・中学生・幼児も順に2.9・3.0・2.2・4.3と、大体同じレベルである。また、「持っていたおもちゃ」の内容を「友達や家族など複数であそべるもの」と「ひとりであそぶもの」とにざっと分けて見てみると、30年代生まれ（40歳代）の持つ「ひとりあそびのおもちゃ」の平均数は2.0で、前期の昭和20年代生まれ（50歳代）0.3とは、6.7倍の増加に跳ね上がる。それ以降の年代も平均数は2.0・2.1・1.3・2.5と大体同じレベルである。

これらのことから、「持っていたおもちゃ」の数に断層があることがわかる。そしてこれは、「集まって複数でするあそび」の断層世代と重なったのである。

昭和12年～ 60歳代	昭和21年～ 50歳代	昭和31年～ 40歳代	昭和41年～ 30歳代	昭和51年～ 20歳代	平成5/6年 中学2年	平成11/12年 幼児
2.0	1.3	1.8	0.9	0.9	0.9	1.8
縄跳び3	ゴム	縄跳び	縄跳び2	ボール	縄跳び8	縄跳び
ボール3	ビー玉	ボール	ボール4	ままごと3	ボール17	ボール2
かるた	まり	バドミントン	バドミントン3	オセロ	バドミントン	バドミントン
おはじき4	ままごと	ゲーム	ままごと2	人生ゲーム	2	ままごと2
お手玉3		トランプ	花ふだ		ままごと3	いっぱいある
ダゲーム		花札	オセロ2		お手玉3	
竹がえし		オセロ	ゲーム		トランプ	
はこいた			人生ゲーム		かるた2	
					すごろく2	
					あいうゲーム	
					バット2	
					グローブ	
					バレーボール	
					いろいろ3	
計18種9人	計4種3人	計7種4人	計17種18人	計5種7人	計46種51人	計7種4人

表7.「持っていたおもちゃ」2「友達・家族とあそべるもの」の内訳

表7で「持っていたおもちゃ」の中で、「友達・家族とあそべるもの」の内訳をみると、世代を超えて変わらないおもちゃとして、「縄跳び」「ボール」「ままごと」が健在である。おもちゃとして持っていて、たいがいは、ひとりより複数であそんだと考えられる。特に「ままごと」は、まわりにある様々なものが取り込まれ、こどもの才覚でより楽しくなっていくごっこあそびの花形で、残って欲しいあそびである。

一人が持つ平均数では「友だち・家族とあそべるもの」の世代差はあまりない。

昭和12年～ 60歳代	昭和21年～ 50歳代	昭和31年～ 40歳代	昭和41年～ 30歳代	昭和51年～ 20歳代	平成5/6年 中学2	平成11/12年 幼児
0.7	0.3	2.0	2.0	2.1	1.3	2.5
自転車	人形	自転車	自転車5	自転車2	自転車3	スケーター
竹馬		竹馬	三輪車	三輪車	三輪車	人形
人形		人形2	ローラスケ2	一輪車2	一輪車2	リキア人形
水中眼鏡		ぬいぐるみ	竹馬	ローラスケト	ローラスケ	砂場セット
絵描きボード		ハウス	人形2	竹馬	竹馬3	キックボード
本		缶ぽっくり	ぬいぐるみ2	人形2	人形10	ブロック
		塗り絵	リカちゃん7	ぬいぐるみ	ぬいぐるみ3	カード
			ジニーちゃん	リカちゃんハウス	リカちゃん	電子ピアノ
			アメリカン	シルバーフミリー	シルバニアス	たまごっち
			ハウス	車	コップ4	いっぱいある
			着せ替え人形	砂あそび	バケツ	
			缶ぽっくり2		如雨露	
			砂あそび2		虫取り網2	
			ホッピング		ラジコン車	
			ブロック		ぶらんこ2	
			ミニカー		フラフープ2	
			ヨーヨー		ブロック	
			積み木		塗り絵絵描き	
			キュウビック		5かかし	
					積み木2	
					クレヨン2	
					ペット	
					ゲーム12	
計6種9人	計1種3人	計8種4人	計36種18人	計15種7人	計64種51人	計10種4人

表8.「持っていたおもちゃ」3「ひとりであそべるもの」の内訳

表8の「持っていたおもちゃ」の中で、「ひとりであそべるもの」の内訳を見ると、自転車・人形が世代を越えて共通するが、昭和40年代生まれ（30歳代）以降からは、「リカちゃん」という、商品名そのままのおもちゃが登場する。「リカちゃん」は、着せ替え人形でおもちゃメーカーのタカラが昭和41年に発売したヒット商品である。その前、昭和39年にアメリカ製の着せ替え人形「タミー」「バービー」がブームで、着せ替える服100枚を集めると当時5万円、と話題になった。このアンケートでは、昭和50年代・平成5・6年生まれの中学生にまで、「リカちゃん」は登場する。

ほかにも、ブームになったおもちゃで「ミニカー」「キュウビック」「フラフープ」が出ている。「ペット」というのも中学生の回答にあった。ペットとは、これまでは家で家族の一員のように飼っていた犬や猫などをさすのだが、「おもちゃ」として登場してきた。先にあげたブームになったお

もちゃと同じように、「ペット」も流行にのって購入されたものであろうか。年表（『昭和・平成家庭史年表』、下川耿史・家庭総合研究会、1997）に「昭和61年に、小学生高学年に欲しいものを聞いたところ、1位ペット2位お金3位自由時間」とあった。同じく、「昭和57年に埼玉県大宮市のデパートに1匹5万円の「オオクワガタムシ」が登場。昆虫の狂乱高値に批判の声が上がる」とあった。

そして、この全国的に爆発的ヒットなどと形容される一大ブームになったおもちゃと言えば、「ファミリー・コンピューター（ファミコン）」である。今回、中学生（女子）51人中24%の12人がゲームをあげていた。年表（同上）に「昭和53年に『インベーダーゲーム』ブーム。どこの喫茶店にも1～2台置かれる」とあり、大人、それも若い大人が夢中になってしていたものが、「昭和58年に任天堂『ファミリーコンピューター』発売。ファミコンブームの引き金に」と、たちまち、こどもの高いおもちゃとして登場する。さらに、「平成8年に『たまごっち』携帯ゲーム、バンダイ爆発ヒット。平成9年の出荷台数1000万個越える」とある。アンケートに答えた幼児4人の内のひとりも、この「たまごっち」を持っていた。「平成9年に第一勧業銀行調べで都内のこどものお年玉平均約2万7568円。買ったものの1位『テレビゲーム』」とある。高価なものもこどもの貯金で買えた。

世代間であまり変化しないものとしては、表9及び表10にみるように「まわりの大人との関わり」と「あそび場」であった。

項目	昭和12年～ 60歳代	昭和21年～ 50歳代	昭和31年～ 40歳代	昭和41年～ 30歳代	昭和51年～ 20歳代	平成5/6年 中学2年生	平成11/12年 幼児
相手をして くれた人	(20) 22	(6) 20	(7) 18	(45) 25	(17) 24	(124) 24	(11) 34
絵本読んで くれた人	(7) 0.8	(3) 1.0	(5) 1.3	(17) 0.9	(5) 0.7	(58) 11	(8) 2.0
お話しも らった人	(12) 1.3	(1) 0.3	(8) 2.0	(22) 1.2	(7) 1.0	(68) 13	(3) 0.8
おでかけ進 れてくれた	(12) 1.3	(9) 3.0	(6) 1.5	(35) 1.9	(19) 2.7	(133) 26	(8) 2.0
お手伝い有	(9)1.0	(2)0.7	(4)1.0	(14)0.8	(7)1.0	(47)0.9	(4)1.0
合計	(60)6.7	(21)7.0	(30)7.5	(133)7.4	(55)7.9	(430)8.4	(30)7.5

表9.「まわりの大人との関わり」関係項目 平均数値

項目	昭和12年 ～60歳代	昭和21年 ～50歳代	昭和31年 ～40歳代	昭和41年 ～30歳代	昭和51年 ～20歳代	平成5/6年 中学2年生	平成11/12年 年幼児
自宅近所校 庭ほか	(22) 2.4	(11) 3.7	(13) 3.3	(49) 2.7	(18) 2.6	(152) 3.0	(8) 2.0
山川路地空 地ほか	(29) 3.2	(5) 1.7	(11) 2.8	(43) 2.4	(18) 2.6	(125) 2.5	(7) 1.8
合計	(51)5.7	(16)5.3	(24)6.0	(92)5.1	(36)5.1	(277)5.4	(15)3.8

表10.「あそび場」平均数値

「まわりの大人との関わり」は、「相手をしてくれた人」だけでなく、「絵本」「お話」「おでかけ」で関わった人と、「お手伝い」も家族間の関わりがあると考え、それらを加えて計算し、一覧表にした。数値の差が2倍近いものに太線を引き比較したが、共通した段差は見られなかった。「あそび場」の幼児が他の年代に比べ低い数値となったのが、唯一の目立った変化であった。

まとめ

アンケート集計の比較で、次の三つのことがわかった。

1. 世代間での変化に、その前年にくらべ数値が開く断層のような世代がある。
それは、昭和30年代生まれ（昭和31年～昭和40年の間生まれ・1956年～1965年・現在41歳～50歳までの40歳代の人達）と昭和50年代生まれ（昭和51年～昭和60年の間生まれ・1976年～1985年・現在21歳～30歳までの20歳代の人達）であった。
2. その断層の内容は、「集まって複数数とするあそび」が、両年代とも、平均数の減少が前年代にくらべ顕著で、階段状に減少している。そして、「ひとりあそびのおもちゃ」が、昭和30年代生まれは、前年にくらべ増加が顕著であり、それ以降の年代も増加上昇している。
3. 年代差があまりなかったのが「まわりの大人との関わり」で、「あそび場」では幼児においてのみ、数値が他の年代にくらべ低く、前年代より30%減少している。

第IV章 考察・分析

なぜ、昭和30年・50年代生まれにおいては、「集

まって複数であるあそび」の減少と、「ひとりあそびのおもちゃ」が増加したのか。

断層の位置となるその時代背景を見ることで、その要因を考察・分析しよう。

『昭和・平成家庭史年表』にあげられたその年度の出来事を拾い出すことで、時代背景が見えてくると考えた。拾い出す項目を、あそびやおもちゃ・テレビやCM・マイカー・マイホーム・消費生活・主な出来事・その他として一覧表を作った。

昭和 30 年代

昭和 30 年代は、様々な産業が復興し、生活環境である道路・住宅などの変化と、景気拡大にともない生活用品や備品などの消費行動の変化した時期であり、こどものあそびや暮らしも強い影響を受けたのである。

昭和 30 年代前半までは、東京など中心都市においても、街の裏通りには駄菓子屋や貸本屋が店を開き、こども独自の消費の場と隣近所のあそびの場として、いつも活気があった。道や横丁の路地は、自転車や大八車、自動車もたまたま通るくらいであった。

それが、戦後間もない昭和 25 年の朝鮮戦争勃発による特需景気をきっかけに、日本の経済成長が始まり、昭和 34 年には、昭和 39 年開催予定の「東京オリンピック」に向けた高速道路建設などモータリゼーション（自動車交通化）と、経済の高度成長期（昭和 35 年）に突入した。それとともに、交通戦争（昭和 36 年）のことが示す交通事故者数 32 万人や昭和 37 年のマイカーブームとで、道路や路地は危険な場所になってしまい、こどもが集まってするあそびの場は、たちまち奪われたのである。

亀岡市においても、都市化の波は、昭和 50 年代頃から急速に押し寄せ、駅前大きな田の跡地に出来た大型スーパー「西友」の開店をきっかけに続々大型店の進出があり、平成 8 年前後からマンション建設のラッシュがあった。「子育て支援センター」来館者の中に、高層住宅に住む家庭が少なくない実態がある。このアンケートの「あそび場」集計結果では、昭和 12 年代生まれ（60 歳代）～中学 2 年生 14 歳までの大きな段差はないが、

幼児のみ、「あそび場」が前年代にくらべ約 30% 減少している。

失われたあそび場の替りに、こどもに焦点をあてた、強烈に惹き付ける娯楽と消費文化が襲いかかったのである。テレビの家庭への普及である。そのきっかけが、昭和 34 年の“ミッチーブーム”と、皇太子と美智子さんのご成婚であった。パレードに向けて、フジテレビなどの民間主要キー局や八つの地方局などが勢揃い、テレビ受信契約数も 200 万台を突破、テレビ時代が実質的に開幕した。それとともに、子ども雑誌の世界でも週刊誌への要請が強まり、『週刊少年マガジン』（講談社）『週刊少年サンデー』（小学館）の二大少年漫画週刊誌が創刊された。

こうして、テレビ・週刊誌を軸に、子どもの娯楽も急速にマスメディア文化の渦の中に巻き込まれていった。テレビは外でのあそびにかわる、大変な魅力であった。

モータリゼーション・テレビ時代

昭和 30 年代生まれのこどもたちが、前年代にくらべ「集まって複数であるあそび」をしなくなったのは、昭和 34 年に始まったモータリゼーションやマイカー時代の幕開けにより、あそび場（道・路地）を奪われ、ご成婚報道をきっかけとするテレビ時代到来で、メディア文化の魅力に取り込まれてテレビっ子になったためと考えられる。

そして、昭和 37 年頃から急増したスーパーや大型量販店に、テレビ CM で見た新製品を求める個人の大型消費時代へと続き、こどもも、おもちゃが増えるのである。

昭和 50 年代

それでは、2 番目の断層、昭和 50 年代（今 20 歳代）はどのような時代だったのだろうか。

昭和 49 年の石油ショック後の、戦後最大の不況が昭和 50 年にはあった。すると、「モーレッツからビューティフルへ」の CM コピー（富士ゼロックス）に象徴されるように、生産力信仰と競争原理の時代から、美とファッションの文化的価値へと変わり始める。アメリカうまれの着せ替え人形「バービー」の人気の、日本企業が、昭和 41 年新たに日本の女の子「リカちゃん人形」を考案・発

売し、まもなく大成功したのも、この背景があったためであろう。人形を買っても、着せ替えていく服や靴・カバン・ファッションにハウスセットなどが目白押しにあるので、リカちゃんへの購買力はずっと継続する。海外赴任中のリカちゃんのパパの登場（昭和64年）など、「リカちゃん人形」も家庭史があり、こどもたちを何代にもわたって惹きつけている。

昭和52年にテレビゲームが登場“ファミコンブーム”が巻き起こった。また、昭和58年の児童環境調査で、こどもの8割が自分の部屋を持ちその9人にひとりが専用テレビを、6人にひとりがピアノを持っていると判明した、という。ピアノ殺人事件が起きるなど騒音公害が問題となると、住宅の密室化が進んだ。外に音が漏れなくなり、それがこどもの個室で専用テレビと、ファミコンブームの受け入れ態勢が整っていく。年々、生まれかわったような新製品の登場が、ますます強力にこども達を惹き付け、ファミコンゲームの器械やソフトの発売日の大騒ぎを、テレビがニュースとして流す。テレビで人気の人形（プリキュア）も、幼児が持っている、と回答にある

リカちゃん人形・ファミコンブーム

「集まって複数であるあそび」の減少による、昭和50年代生まれの断層は、住宅の密室化で外に音が漏れない、こどもの個室と専用テレビによって、ファミコンゲームが受け入れられたこと、テレビCMでブームを呼ぶ、新しいあそび（おもちゃ）の登場があったため、と考えられるのである。

尚、今回アンケートの「自然の中でのあそび」の集計平均数値では、世代間の断層はない。「こどもは、外であそびなさい!」と言う大人もいて、戸外あそびは、その機会を失わずにきたと言える。また、今も自然環境があるということでもある。亀岡市内で見られるような山・川や原っぱには、土に水、草花木そして虫など小さな生き物から、タヌキ・キツネ・シカなどもいて、こどもにとって魅力のあそび場である。亀岡市が、昭和に続き平成まで自然環境を保っているのも、多く残っている周辺の農地・山のおかげである。中心部や京都側の開発地域は、道路整備とで、急激に住宅地

化・商業施設化している。地球規模で叫ばれている豊かな自然を残すことは、生命環境だけでなく、こどものあそびという人類の文化に繋がることでもある。

第V章 まとめ

「こどものあそびと暮らし」について、アンケートをとり、その結果から変わったもの・変わらないものをみつけようと、様々に考察してきた。

戦後の高度経済成長の波に乗り、昭和30年代を境に、こどもの「持っているおもちゃ」の数も増え、なかでも「ひとりあそびのおもちゃ」の飛躍的な増加もあった。その一方で、地域で繰り広げていた「集まって複数であるあそび」が年を追うごとに減少する、という重大な変化がみつかった。

「集まって複数であるあそび」として項目であげた「こままわし」「ちゃんばら」など12のほかには、その他として自由記述で延べ82もあがり、そこには、時代を経た伝承のあそびが多くあった。あそぶこどもは年を追うごとに減ってはいるが、これらのあそびを経験した大人は増えているとも考えられる。

しかし、「こどものあそびと暮らし」の時代背景には、今も加速するモータリゼーションによる地域環境の変化や、アメリカ文明の伝承として追い求めたマイカー・マイホームの豊かで便利な生活と、テレビやメディアを駆使して作った情報と消費の社会、そして個人の消費行動とは、もうもとの戻せない、変わらない現実がある。その影響をさらに「こどものあそびと暮らし」が受けていく、と考えられる。

私の提言

昭和30年代生まれから始まる、「集まって複数であるあそび」の減少は、こどもの成長に大事な体験の減少を意味する。地域の中でこどもがあそばないのは、地域社会の一員としてこどもが育たないことでもある。これを深刻に受け止めたい。

まず、こども達が地域で「集まって複数であるあそび」をしなくなると、こどものあらゆる生活

空間がいつきに狭まる。毎日が、自宅のそれも自分の個室と学校（保育所・幼稚園）の2か所のみの往復移動になり、人との出会いも地域での時間や場所も、こどもの生活から極度に減ってしまうのである。教師や保護者から離れた自由な時間と、それを過ごす空間での仲間とのあそび、そこで得ていたコミュニケーションやこどもなりの知恵・良識・正義・自治を培う体験を失うのである。「ひとりあそびのおもちゃ」の増加は、この状態をよりすすめてしまうであろう。

こどもがこどもでいられるには、まず人（あそぶ仲間や出会う人）と、地域の中の空き地などの空間と時間がある。十二分に魅力的な地域環境とあそびが不可欠である。

「集まって複数でするあそび」と「友だちや家族とあそべるおもちゃ」の増加をはかる。地域の中に、こどものいる所に、そういうあそびの場をつくることだ。世は高齢化の時代だ。年配者とこどもとが出会い、ともにあそぶことで、あそびは復活する。

アンケート項目「♡これからのこどもたちへ」への自由記述欄にも、多くの方が書いていた。中学生は「今のうちに思いっきり!」と繰り返し、若い父母は「たくましく、外で体をつかって」、年配者は「質素な生活と、そして自然にふれて」と、それぞれにあそびを促す熱心な言葉が続いていた。こどもに呼びかける時、誰もが熱い思いにかられる。それは、みんな、世界中いっしょだと思う。この思いが集まれば、優しくして強い力になるだろう。

今日、学校では、生徒の送迎や見守りを地域の協力で始めている。痛ましい事件がきっかけではあったが、今後はこどもを守ることから育つことへ、一歩、踏み出そう。

その仲間入りから、私は始めようと思う。

謝 辞

卒業研究のアンケート収集に際して、快く受け入れてご協力いただいた次の皆様に、お礼を申し上げます。

NPO 法人青空ふれあい農園・ハーブ倶楽部の農園ディサービスの久保代表様はじめ利用者様・

スタッフ様には、ディサービス当日の昼食後、昔話に花を咲かせながら記入していただいた。隅々まで、その他の自由記述式の欄にも詳しく記入された。

亀岡市子育て支援センターの稲垣局長様・竹井センター長様には、アンケート収集をご了解いただき、「かめおかつこひろば」に来館の皆様にご記入していただいた。こどものあそびを見守りながら、おもちゃ談義を楽しまれる父母や祖母の方々だった。

亀岡市立育親中学校の俣野校長先生はじめ、先生がたや生徒のみなさんに格別のご協力をいただいた。中学生になんとか会いたいと意を決して、直接学校に電話をして、校長先生にお願いをした。依頼文とアンケート用紙見本を学校に届けた後、項目の改善で実現した。期末テスト最終日に実施され、ずっしりと重い回答を手を、感激した。

皆様には、ほんとうにありがとうございました。

引用・参考文献

- ①塩野米松（文）・松岡達英（絵）、1988年、『父さんの小さかったとき』、福音館書店
- ②越智登代子（文）・ながたはるみ、1988年、『母さんの小さかったとき』、福音館書店
- ③高山英男・藤田真男ほか、1990年、別冊『太陽一昭和35年—48年こどもの昭和史』、平凡社
- ④中村文夫、1989年、『子供部屋の孤独—テレビ第一世代のゆくえ—』、学陽書房
- ⑤河原 宏、2006年、『日本人はなんのために働いてきたのか』、ユビキタ・スタジオ
- ⑥森 昭雄、2004年、『ITに殺される子どもたち—蔓延するゲーム脳—』、講談社
- ⑦樋口恵子、1993年、『サザエさんからいじわるばあさんへ』、ドメス出版
- ⑧谷村智康、2005年、『CM化する日本』、Wave出版
- ⑨上野千鶴子、2002年、『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』、平凡社
- ⑩大河直躬、1986年、『住まいの人類学』、平凡社
- ⑪家庭総合研究会（下川耿史ほか）、1997年、『昭

和・平成家庭史年表』，河出書房新社

⑫森山茂樹・中江和恵，2002年，『子供史』，平凡社

⑬西井和夫ほか，2001年，『ポスト・モータリゼーション—21世紀の都市と交通戦略』，学芸出版社